

浄土

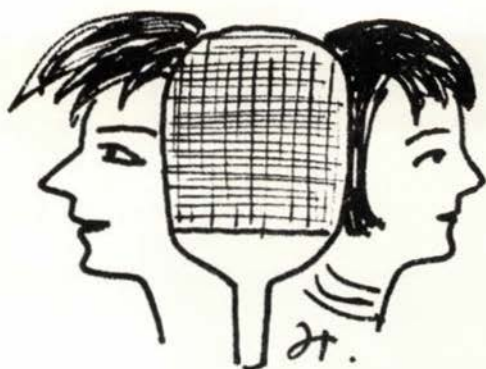
1980—12

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日 運輸省(特設設案部誌)第三五号
昭和五十五年十一月二十五日印刷 昭和五十五年十二月一日発行
第四十六卷 第十二号



教育のバランス

先日アメリカ大統領選挙が行われ、レーガンがカーター現職大統領に勝ったことは、皆様のよく知られるところです。非常な大差で



した。しかし投票の結果ですから国民は納得します。民主主義の社会では、それが種々の危険性をはらんでいるとしても、尚、投票によって人間を選ぶことが一番公平だと思えます。私の奉職する大正大学も、近頃は選挙で学長を選んでいきます。

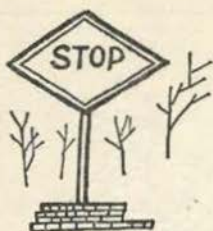
私の関係している日本学生卓球連盟では、本年スカンジナビアに選手を派遣することになり、先般その人選結果が発表になりました。本年は男女共に遠征し、特に東日本学生選手権、西日本学生選手権を中心に選手選考をすることになっておりました。しかし発表結果は、男子七人、女子二人。男子に関しては問題はないのですが、女子の方はベスト四が一人も選ばれていないのです。即ち、東日本学生の優勝者も準優勝者も選ばれなかったのです。この事は、先日の関東学生卓球連盟

の会議で大問題になりました。どういうデーターをもとにして選考したのか分りませんが、ベスト四から一人も出ないのは、女子卓球関係者、特に現場を預かる監督には納得出来ません。やはり誰がみても納得行く人選をすべきです。これが選挙なら、意外の結果が出ても納得するのです。人間がする事ですから完全なことはありません。人間がする事はどうしても主観が入ります。またある力が働きます。利益代表の強く主張する意見に流れやすくなります。これは選挙とて同じなのですが結果として容認し得るということです。

私がここでこの問題を取上げたのも自分が少なからず被害者側に立たされたからであって、逆の立場だったら如何に考えたか、いずれにしても人間とは小さくかなしいものであり、慈悲の精神を持たぬ限り、公平に考える事は難しいようです。それだけに宗教にたずさわる者は言うに及ばず、スポーツ界の者も常に心して高い所から見渡し判断出来るよう、慈悲の精神を養わねばと考えます。

(佐藤行信)

十二月号



五逆は重病の淵源なり、またこの念
仏は靈藥府蔵なり。この薬にあらざ
れば、何ぞこの病を治せん。

——『選択本願念仏集』

(定本法然上人全集1 P.147)

目 次

法 話

歳末二想……………山 口 諦 存……(2)

一年間の回顧 遠忌に明けてご誕生に前進……………高 橋 良 和……(6)

(連)(載)(法)(話) 第三回

信火行煙……………小布施 弘 学……(10)

◇思い出のページ(『浄土』第二巻第十二号より抜粋)

葦間の月影……………真 野 正 順 ……(21)

〈随想〉ほとけとの出会い(九)……………佐 竹 隆 三……(16)

訪ソ旅情……………細 田 隆 善……(14)

〈句会だより〉 鬼怒川吟行記 ……………塩 山 三 九……(34)

〈ずいそう〉

大美術館ウィーン……………曾 田 文 雄 ……(28)

浄土句集……………一 田 牛 岐 選……(32)

法然上人讃仰会創立45周年記念式典記念写真ア・ラ・カ・ル・ト……………(26)

〈表紙裏・巻頭言〉 慈悲の精神 ……………佐 藤 行 信

念仏ひじり三国志⑦——法然をめぐる人々……………寺 内 大 吉……(37)

表紙 土屋正男画

カット 大正大学美術部

法 話



歳末二想

やまぐちたいそん
山口諦存

(浄土宗開教振興協會事務局長
明石市光明寺住職)

おさとりの日(成道会)

ことしのカレンダーがとうとう一枚となり、とたんに十二月の慌しい街頭風景が見られ師走、歳末、年の瀬の実感が迫ってきました。

十二月は臘月ともいわれ、一日から八日まで禪家の僧堂では、お釈迦さまのおさとりになりました由来によつて、俗塵を払いきびしい結界をして、あたえられた公案ととりくんで、昼夜の別なく工夫する雲水や居士大姉を思ひます。

八日朝、師家と雲水や参禅の人が命をかけての、坐禅が終わります。これを、大接心、臘八の大接心といい臘八ともいわれています。

インド、ヒマラヤの南麓、カピラ城に都を置く釈迦族の太子、シッダルタは二十九歳、人間の苦悩から離れ真実の道を求めて、遂に地位も財も妻子をも捨てて、苦行者の群に入つて六年の難行苦行の末、それはさとりを得るために何の役にも立たないことを知り、苦行林を出て尼蓮禪河の流れに、長い間の垢を洗い清めました。

たまたま、村の一少女は衰えてはいるものの、その気高い姿を見て、手に牛乳を捧げて太子に供養し、太子は

この供養を喜んでうけ、体力を回復することができました。太子はやがて明るく地は平らで、柔かい緑の草が生え、美しい花が咲き匂い、一本の大きな菩提樹がある林の中に歩を進めました。草刈の少年は修行者のために吉祥草を供養しました。太子はそれを座として菩提樹の下に坐し、さとりを開かなければ生きてこの座を立たないと心に誓い、幾多の魔王と戦った。それは太子の心中の賊との戦いでありました。遂に心の平和を得、愛欲と無知の世界から脱して、さとりに達し最高の知恵を体得せられ、仏陀、世尊となりました。太子三十五歳、十二月八日暁の明星を見られたその瞬間であったといわれています。

さとりを得た仏陀は、菩提樹の下に坐ったまま、七日のあいださとりを楽しむを受けつつ坐しておられました。が、この喜びをひとりのものとしてはならないと、伝道説法を決意されます。仏陀の苦行時代にいろいろと助けてくれた五人の比丘に教え説くために、二百五十キロを超える鹿野苑への道を遠しとせず、最初の説法の旅に出られました。

五人の比丘は苦行を捨てた太子をさげすみ、容易に近

づきません。しかしようやく説得して、初転法輪（しょてんぽうりん）、最初のご説法が行われました。

ここで、思いあわすことは、法然上人が承安五年三月、四十三歳、善導大師の観経疏によって、口に称える念仏こそアミダ仏のご本願の念仏であるとの、いわゆる声を本体とする念仏が、一切の人びとを救うとの確信を得て、回心せられ、十八歳の青春以来耐え難い寒冷を忘れてあの黒谷に籠り、身につけたすべての学問と知識をかなぐり捨てて、ただひたすらに念仏の行者となり、浄土宗をお開になったことであります。

お釈迦さまのおさとりも大きな放棄によって生れ、法然上人のご開宗もまた、実に大きな放棄によってもたらされました。得たものをあえて捨てることは、容易なことではありません。一切を放下したところに、新しい境地が開けたのであります。

法然上人のご伝記に、

「上人一向専修の身となり給にしかば、つゝに四明の巖洞をいでて、西山の広谷といふところに、居をしめ給き、いくほどなくて、東山吉水のほとりに、しづかなる地ありけるに、かの広谷のいほりを、わ

たして、うつりすみ給。たずねいたるものあれば、浄土の法をのべ、念仏の行をすゝめらる。化導日にしたがひて、さかりに、念仏に帰するもの、雲霞のごとし。」

とありますが、四明岳、叡山の西塔黒谷を出て京、西山の広谷へ下って法然上人には、黒谷聖ひじり」として、生活が一応保たれていた今までは異った、生活の不安を意に介せず、かねてより高弟信空からその噂を聞いていられた、遊蓮房円照を訪ねるとともに、しばしの居を広谷に定められたのであります。

遊蓮房は信空と俗縁も深い間柄であり、殊に善導大師の教えに従って高声念仏をとなえ、たびたび念仏に靈証を感じていました。上人は遊蓮房との出会いによって、口にナムアミダ仏と称える念仏が、み仏の本願念仏であるとの確信を深め、やがて居を東山の吉水に移して、より多くの人びとに念仏の道を伝えずにはいられなくなつたのではないでしょうか。

水を求めて渴きを癒すように、念仏の教えに救われた民衆は雲霞のようであつたとは、真相を描写し尽していません。

上人は常に「浄土の法門と、遊蓮房との出会いこそ、わたくしが人間界に生れた思い出であります」と述懐せられました。上人を支えた陰の人、それは遊蓮房であります。

お釈迦さまは五比丘のご教化、初転法輪より八十歳のご入滅まで、法然上人も開宗以来八十歳のご往生まで、人間最高の幸を得る道を書きつけられました。

ごとしは、法然上人がお釈迦さまのご本懐であります、本願念仏のみ教えをうけつがれました、中国の善導大師一三〇〇年の大遠忌ご正當の意義深い年であります。

この成道会には、出山の釈迦像と善導、法然さまし両画像を拝して、おさとりの日をしのびたいと思います。

蟻八の木板きびし雲動く

除夜の鐘

年の瀬も押し迫り、ご先祖の墓参もすませ、三十一日にはすっかり迎春の準備をととのえ、茶の間に家族がつ

どう夜には、思い出多いこの年を送る恒例の花やかな紅白歌合戦がたけなわなうちに、やがて行く年来る年となり、全国各地の除夜の鐘が鳴り響き、新年を告げます。百八つをつく除夜の鐘は、人間の宿す百八の煩惱を取り除き、清く美しい心となって、新しい年を迎えるための、罪障を消滅する鐘であります。

わたくしの寺も毎年除夜の鐘をつきます。十二時前には檀信徒の若い男性女性、子連れの夫婦などが、鐘楼の傍に燃える焚火のまわりへ賑かに集まってきます。

定刻第一打の鐘が響き、次つぎに合掌して心を洗い、力をこめて一打して、新しい年にかける願いごとを秘めて又合掌します。

受験生や良縁を求める男女もいるはず。子の成長や家族の安泰を願う人もいましょう。とに角、各人各様の願いをこめる鐘の音は、力強いものか弱いもの、全く整わないのも除夜の鐘つき風景でありましょう。

百七、百八の二打をわたくしがつき納め、般若心経を誦して天下和順日月清明を祈り、お十念をとなえて、一同に新年を祝い、清酒を供養してめでたく終る頃には、午前一時を過ぎ、星は美しくかがやき、冷気に身のひき

しまる思いがします。

この鐘は約二百五十年前、享保十四年七月十五日、第五世永蒼上人の発願により、十五日講中、二十五日講中及び結縁の人びとによって施入され、治工は京都釜座の藤原国次、銘は京都阿弥陀寺得阿上人、形状は「けさだすき型」で径二尺九寸、高さ四尺七寸、重量二百六十貫匁、竜額は双竜造り、胴には四天王を配し、ほうおう、唐獅子、唐草を陽彫し、乳は高く力強く、けさだすきの柱には百万遍知恩寺西音上人の梵漢二様の名号が陽彫され、江戸時代の鐘としては形式がよく整っています。

さて、鐘銘に「御祝 皇帝聖寿 乾天無窮 国君武命 坤地無限 坦越富榮 法孫万歳」云々とあり、聖寿無窮の四文字が、戦時中の金属供出の難を救いました。既に市の指定文化財として、その価値を認められています。

わたくしは、毎年除夜の鐘をつきながら、仏恩を謝し、この鯨音を聞く人びとに、仏心を呼び起し、世間安隠なれ、仏法弘まれかしと念ずるのであります。

鐘をつく綱たしかむる年用意

一年間の回顧 遠忌に明けてご誕生に前進

今年は、法然上人のおしえの師である中国の高祖善導大師の一千三百年の大遠忌の年であった。五十年毎の大法要であるので、我が宗の檀信徒も、寺院も一生一友の勝縁であったといえる。

総本山知恩院をはじめとして、各大本山においても、一昨年、今年にかけて、それぞれ大法要が修行され、特に京都本山の知恩院では、早春の三月に二十万人の団参の参拝があつて盛大に修行されたのは、ありがたいことであつた。

しかも同じ昭和の時代に、二回もこの大法要、すなわち一千二百五十年と、一千三百年が修行されたのは、珍

たか
はし
りょう
わ
高橋良和



しいといわなければならない。まさにまたとない一期一会の法要といえるのではないか。

折も折である。日中友好のときである。先年結成された日本友好浄土宗協会という会がある。

もちろん中国と親善提携のための会であつて、浄土宗では、『日中浄土』という雑誌を発刊して、中国との提携に力を注いでいるが、特に本年は、宗務当局が積極的に力を入れて、使節団の派遣から、善導大師の御廟である中国西安の大師の大雁塔のある神禾原での、日中仏教徒合同による大遠忌の修行は、非常に劃期的なことであつた。

先の一千二百年の大遠忌のときにも、我が宗の代表が、この地を訪れたが、残念ながら中国の治安は、今ひとつであつたので、かなり遠い太原の玄中寺という、大師縁りの寺へは、代表二名が参詣したほどであつた。

ところが今回は異つて、この大遠忌には百五十名の代表団が赴いているのである。

前回のときには、この太原の玄中寺に、東西本願寺と、浄土宗から、導緯禪師を東本願寺、曇鸞大師を西本願寺、善導大師を浄土宗から、それぞれ絵像にして贈っている。もちろん今もこの絵像は、この玄中寺の三祖堂に安置されている。

今回は、浄土宗として、善導大師の木像を宗内寺院、各種団体の協力で製作し、それを西安の香積寺に贈ったのである。もちろん莊嚴具一切もつけてのことである。

もうひとつ大書したいのは、この西安の神禾原というところに、立派な本堂が建設されたのである。

これはもちろん中国仏教協会（趙樸初会長）の努力であつて、中国の仏教が、現実存在するのかどうかといつたことでも、いろいろと取沙汰されているときに、見事にこの本堂が建てられたということは、中国仏教が現実に

生きていることを思わすことでもあり、それ以上に中国仏教協会の好意をありがたく受けたい。

趙樸初会長の構想によると、この神禾原の大師縁りの地に、将来七堂伽藍の建立も考えろといつたことばを聞いて、浄土宗にとっては、まことにありがたい、そしてうれしいことであるといえる。

そして五月十四日、この新築の本堂において稲岡黒谷本山法主を導師として一宗の大遠忌法要を修行したが、中国の仏教協会でも中国僧が百余名出仕して、やはり大法要をこの日修行したのである。

両国仏教徒が、日々にとなえる南無阿彌陀仏の称名の声こそ、一千三百年前の善導大師を慶讃する意義深い大法要であり、まさに日本仏教各宗に魁けてのこの大法要は、歴史的な意義があつたといえる。

また本宗の教師や、有縁の人々による阿彌陀經一千巻の写経の奉納なども、後生に残る事業であつた。

かくして意義深き大師の一千三百年法要とともに宗内の総大本山の行事は、一応終つた。

しかし我が宗の各地の寺院では、この大遠忌を個々に修行しているので、本年からさらにこの法要はつづくこ

とになる。

こうした大遠忌についての成果は、一宗のよろこびであつたが、一方において昨年来に浄土門主であり、総本山知恩院門跡であつた岸信安親下が十一月に御遷化になり、そしてそのもとに、一宗の推せんで、その当時の大本山清浄華院の高島寛我法主が、総本山に入山され、善導大師の大遠忌を修行されたのである。

高島新門主は、九十一歳の高齢であるが、至極お元氣であるのがなによりである。

そしてこの清浄華院法主の後任には、江藤澄賢師が、やはり一宗の推せんで入山し、黒谷金戒光明寺の稲岡寛順新法主とともに、京都の二大本山の法主の異動があつたということもまた珍しい。

こうした総大本山の動きに対して、宗務庁においても、昨年末の武田育彦氏の総長就任と内局人事の異動は、大法要の修行もあつて、時日を遅らせていたのが、七月にその人事を行った。若い人材の登用といえるだろう。

そして善導大師の大遠忌につづいて昭和五十七年に修行の法然上人ご誕生八百五十年の慶讃大法会の準備態勢

に入つた。

この慶讃大法会は、ご誕生ということからして、青少年中心のものであると思うので、一宗に所屬する各種団体は、いよいよこの活動の実動に入るのが明年であるといえるだろう。

我が宗門の動きは、平穏であり、いろいろな意味において、一宗の動きが定着してきているが、これからは、その方向づけといったことをもっと考えることである。

教化宗団ということを目標とするかぎり、この大遠忌から、慶讃大法会へのバターンのなかに、教化宗団としての在り方をもっと切実に考えて、足固め、地固めをすることであり、地方末端への働きかけが必要であらう。

たまたまこのとき法然上人讃仰会が、創立四十五年を迎えたのであり、十一月八日の記念式などが行われたのを機会に、さらに飛躍することを積極的に考えるべきである。

我が宗の平穏な動きとは反対に、毎年注目をうけている東本願寺の紛争は、その頂点に達して、教団の改革派が法主に対して告訴し、法主側もまた告訴するという事件、いよいよ司直の手が入り、今後どうなることかと思

われた矢先、双方の和解が成立した。まさに急転直下である。

これならもっと早くやっておけばと思われるが、なんとしても仕方がないこと、門徒もほっと胸をなでおろし、十一月下旬の報恩講は、仲よくつとめられた。

昨年の報恩講では、ビケを張ってつかみあいのあったこと思い出すのである。御開山も安心されたことである。

西本願寺は、春から十月まで、門主の伝統報告法要が修行されて、連日地方からの門徒代表が参拝して、本堂や境内を埋めた。すばらしい企画であった。カンボジア難民の救済募金も、この法要に行つて八千万近い金額が集まっている。

我が宗でも、多少ながら募金を行い、岸門主の葬儀の費用から五百万円、その他全国寺院に呼びかけて募金中である。

比叡山延暦寺では、伝教大師の構想であった法華総持院、いわゆる東塔が落慶したので、伝教大師の出家得度一千二百年法要の最後の年の仕あげとして、さる十月一日その落慶法要を行った。八億円の工事なのであり、一

建立というおまけつきであるのがうれしい。

各宗の同和問題への関心や、その徹底も、盛りあがってきた。無関心であつてはいけないことであるので、さらに期間をかけたい。

創価学会と日蓮正宗とのあつれきを、いろいろと聞くと、起るのは当然であろうが、じつと注目して、しっかりとその在り方を見つめるべきであらう。

このような思い出をつづっているうちに、早や十二月である。

明日の教団への思索をどのように考えるかが、十二月の課題である。

『新刊』

總本山知恩院
大本山増上寺
大本山善光寺大本願
布教師 小布施弘学著

『伝統の変容と進化』

— 仏教的視点より現代人への提言 —

B 6判 二四〇頁 価一五〇〇円

(一六〇円)



連載法話

第三回

信 火 行 煙

小布施 弘学
おぶせ こう がく

(長野市長明寺住職)

釈尊によって開導された仏教の教義を、各宗祖それぞれの宗教的实践によって私達に示された信条は、いかなる時代にも、どんな人々にも適応するものである。教化伝達の方法は、時機相応で絶対的条件であるが、時代に媚び、人におもねて、教義信条を勝手に変えてはならない。もし、その教化伝達の実があらならない場合は、それになたづさわる人が、教えを充分に自分のものにしていない結果であると考えることが先決である。

「自信教人信」先づおのれ自身が信じてこそ、始めて人に教えて信ぜしむることが可能である。自分に燃ゆる

が如き道心を持たずして、どうして人の心に、道心の火を点ずることが出来ようか。そして、伝道教化は、宗教専門家のみの仕事であってはならない。その教えに生かされる人々が、信仰の喜びを人にわかつことによって表現し、報恩されねばならない。

ややもすればこの点が、既成仏教に欠如している重大な事柄である。教義敷衍の行為が、自分達と異った僧侶という階層より導かれていくことも大切であるが、また一面、自分達と同じ仲間から入信の方法と、信後の喜びを聞くことが、強い影響力のあることも見落してはなら

ない。

信者一人の育成は、その人が、ひとり静かに信仰生活を喜ぶという結果になるのではなく、その人が、同信をつくることに向けられていくことが必要である。

さて、救済の相手となるものは、苦しみ悲しんでいる人だけであってはならない。

確かに「苦しい時の神だのみ」という大衆の求めに応える用意も必要であるが、宗教に無頓着で生きている多くの大衆に、宗教へ心を向けさせることが更に重大である。

苦難にあえぐ人が、途方にくれて、宗教に救いを求めることは当然の心情かも知れないが、なんの災難もなく平和安穩に生きている人達に、その因って来たる大いなる恵みを自覚させ、その喜びを報恩感謝という形によって、信仰へ誘うことが、今日の教化の急務である。これが仏法興隆の基盤とならなければならない。

人生が、禍福の織りなすものであれば、人の心は悲しみと喜びに交錯された世界である。苦を抜き樂を与えよ

うとする仏の慈悲は「苦と樂」の見つめ方を教えてくれるものでなければならない。

人の喜び、樂しみは、人によって千差万別であると共に、悲しみも、苦しみも、それと同様である。それが、その人によって唯一の樂しみであっても、他の人にとっては耐えられない苦痛であるかも知れない。

私は、いま人間が共通して、意識しなければならぬところの「悲しみと喜び」を考えてみたいと思う。喜びは悲しみを見つめることによって知ることが可能である。

現代は末法濁世であって、朝夕報道されることは、余りにも喜びのない、悲しい事実の多いことである。

親子水いらずの平和な生活も、息子に嫁を迎えて更に幸せが増す筈であるのに、老若の間に、心の亀裂が生じてきて、遂に核家族の形態をとらざるを得なくなり、老夫婦が淋しく暮す結果になることは悲しいことである。可愛い孫の顔を見たくとも、なかなか思うようにいかず、孫を抱くことさえ許されない人がある。

子供達のためにと、永年蓄積してきた財産も、子供の背信に憤怒して、無理に老夫婦が旅に出て浪費している

姿は、人間のやりきれない淋しさへの反抗である。

家族思いの夫が着実に出世街道を進んでいくことに、妻としての喜びがなく、恵まれた子供達が、頭悩も身体も優れ、また家計の不自由も覚えないう幸せに、嬉しさを感ぜない妻が、*「無事であることに飽き」*て、遊情な心が、なにか刺戟を求めようとして、家庭を破滅に導く姿に、人間の貪婪さ、浅間しさ、愚かさを思い出さざるを得ないのである。

医学の発達は、新たな病気を発見し、何故か、病める人の年毎に多くなり、全治することのない高血圧、救いようのない癌の瀬発に、人間の肉体はおびやかされている現代である。そして社会が老齢化して、老人の人口が年毎に増加し、生きる屍の如く生きつづける植物化人間もその数が多くなって来たのである。

立身出世して栄光の座についても、その誇りと義務観がなくなつて、我利我欲に走つて、奈落の底におちこんでいく人々を見たとき、*「煩惱の心、涯しなく、底なしの泥沼の如き」*と喝破された、中国の善導大師の訓誡を切々と感ずるものである。斯くの如く、人間は誠に悲しい存在であると、意識した時、この苦悩を喜びに転じて

いこうと思う心が起きてこななければならない。もしその心の生じない人は、罪業の埵（かたまり）にありながら、それを感じない鈍者である。苦しきより救われたいと願う人に、手を差し伸べるものが宗教の使命であると共に、罪を罪と感じない人にそれを意識させて、救いあげることが、なお一層重大なる救済である。

日本は仏教国であるといわれるが、寺院や僧侶の数、葬祭の執行が殆んど仏教の典礼によって行われるということだけであつて、仏教信仰に篤い国民集団ではない。むしろ日本人の多くは無信仰であると云つても過言ではない。

何故ならば、日本人は罪の意識が薄いのである。私達に仏との不離結合がなされていれば、おのれの罪業を仏に向つて「罪」と意識するけれども、日本人は、おのれの犯した罪を、仏に向つてではなく、人に対して「恥」として意識するが故に、罪悪感が薄くなつてしまふのである。だから「恥を知る」「恥をかく」という意識は道德の範囲であつて、宗教ではない。人に向ける「恥」

を、仏に向つて罪と自覚するところに宗教が存在し、人間が仏に救われていく道が開けるのである。

「われ罪人なり」とおのれを悲しむところに、罪業深重の凡夫を救済の対象とする仏の本願に遇ひ喜びが現われてくる。

換言すれば、自分自身を深く掘りさげて、得たところのものは、罪障に泣く悲しみであつて、それは、そのまま、み仏との出合いの喜びにかわるのである。そして、私達は救われようのない凡夫であると共に、その反面、「一切衆生悉有仏性」一切の衆生は悉く仏性を有しているものであると、約束されている私達でもある。

「南無阿弥陀仏」の念仏は、一声一声のなかに、自分の罪障を意識することであり、一声一声のなかに、み仏に抱かれていく喜びを確認していくことである。念仏生活は、赤ん坊が母の胸に抱かれていく如く、念仏を称えてみ仏の大悲のふところに生きることである。

そして、一声即現の仏は、念仏を称える人の心に宿り、人の受くべき苦しみ、悩み、悲しみ、恐れを、仏が私達に代つて受けてくれるのである。だから念仏が絶対な救いとなるのである。

ドス黒く汚れたバケツの水も、きれいな水が流れこむに従つて、その濁りが、やがて消え去つて、清らかな水にかわるように、この心は濁悪であつても、そのまま申す念仏によつて、常恒の道を、清く生き続けることが出来るのである。そして救われた喜びは、苦悩と恐怖におののく人を同信に導くことによつて、更に、おのれの信仰が増進されるのである。

おのれのために楽しむことは、小さな喜びしか感じないが、世のため人のために、尽した喜びは、たとえようもない満足感にひたることが出来る。法蔵菩薩の苦修練行に思いをいたすことが、私が苦難に立ち向う力の源泉であることを心に強く銘記して生きることが念仏者の道である。

み仏を慕ふ心のひとすじは
苦海を來たる力なりけり

(聖譽)

訪　ソ　旅　情



ほそ　だ　りゅう　ぜん
細　田　隆　善

(東京・三好勢至院住職)

はやばやと不在投票済ませ来て

ソ聯へ旅立つ蒸し暑き午後

ハバロスクの日本人墓地に名も知らぬ

人々の墓に誦経高々と

ハバロスクのポプラ並木を歩き行けば

風に柳絮は雪の如舞ふ

その昔間宮林蔵のぼりたる

アルームの河眺めてゐたり

案内するソ聯仏教界のラマ僧は

洋服を着てジーパンをはく

われら乗る大型自動車行くところ

トラックも車も道開け呉れぬ

われが乗る国賓接待用自動車に

警察官は拳手の礼する

モスクワへの大平原のハイウエイ
チャイカは時速百二十キロ

ウオロージン宗教委員長質問に
答へて汗をにこやかに拭く

若葉萌ゆモスクワの町に行き交ふ
若き女性の胸豊かなり

コルホーズの道に老婆が一束の
紫の花椅子に乗せ売る

モスクワの古き墓には十字架を
新しき墓には星を掲げり

ダッサン寺のパンボラマ管長八十歳
ホームに來りて別れを惜しむ

レセプションにソ聯仏教会のプレゼント
贈られて知るわがパースデイ今日

ピオネールの少女の縫へるイリースを
少女は笑みつつわれに与ふる

レニングラード守りたること九百日
慰霊の塔に心経を読む

レニングラードは古き家並の続きゐて
祖国を偲び旅愁のつもの

欲しきものソ聯の女性に問ひしとき
平和が欲しい即座に答へり

風薫るイルクーツクの駅前の
ホテルの窓に柳絮舞ひ込む

ブラスバンド送葬曲を奏でつつ
葬列は赤き柩担ぎ行く

幾十台戦車を載する貨車長し
何処へ行くか国境の駅

ても、少しばかり成長したという実感をもつことができました。このプラスは、病気のため入院前後二・三カ月仕事ができなかったというマイナスを補ってあまりあるものであります。

このことについては、いずれ稿を改めて「病気の人間学的意義について」と題して考察してみたいと思います。

本誌六月号の小論中での「時間」についてのわたしのささやかな考察が予想外の反響をよび、とくに若い方々から質問の電話を頂き、また八月号の休載についてお叱りを受けましたが、引きつづき「時間論」に関してわたくしが仏教から何を学んだかについて書いてみたいと思います。

今から三十年ほど前、金沢医科大学精神医学（現在の金沢大学医学部）教室助手および講師として精神病者の臨床にたずさわっていましたが、その五、六年の間に顕著な健忘症状群（コルサコフ症状群）を呈する患者を数名を受け持ち、これらの健忘症患者に共通する一つの特異な所見として、「時間体験障害」が認められることを発見しました。そして、それら

についての考察は「健忘症状群の臨床病理学的研究」としてまとめられ、学位論文となりました。

「時間」に関する考察は、したがって三十年來あたためてきたテーマということになります。東京女子医大消化器病センターの病室のベッドに臥して、繰りかえし「時間」の問題を考えながら、若き日の研究者としての自分の姿を追想し、懐しくまた楽しい時をすごしました。

今回の入院は、苦痛もなく、退屈することもなく、「時間論から見た人間」に関する考察をわたくしなりに深めることができたように思います。まことに有難いことであります。

人間の生は二つの包括的な媒体（空間と時間）のなかに埋めこまれています。

空間は、具体的に見るならば、支えとなる大地の上に立てられていて、何らかの意味で確固たるもの、信頼できるものをもっており、空間のなかに準備をととのえて、安んじてその中に住まうことは、人間にとって比較的容易に成功するように思われるの

であります。

しかしながら、時間は流れ去るもの、消滅するものであり、それをとどめることはできません。空間におけるように、時間においても正しく準備をととのえて、その経過に沈着に信託し、未来を信頼しつつ住まうことは望ましいことでありましょうが、それは本質的にきわめて困難なことであり、そのようなことは、わたくしにはとても成功するとは思われないのであります。

消滅する時間による脅威から解放されるということは、果して人間に可能なのでしょうか。

「時間性」とは「無常性」ということであり、「はかなさ」のことであり、いやもつと尖鋭的に言えば、消滅する時間に直面しての人間の「むなしさ」であると言えましょう。そして、このむなしさが人間に意識されるとき、彼はその魂のもっとも深いところで驚愕し、助けを呼ぼうとするのであります。消滅する時間に対抗する拠り所はないものか——という問いから、消滅する時間に対する対立概念、すなわち「永遠」(Eternity)の概念が生ずるものと

思われます。この「時と永遠」の問題については、後に改めて詳細に論じたいと思います。

「死への存在」としての生物はすべて「時間内存在」であることは自明の理であります。人間も動物と同じように「時間内存在」であることには変わりはないのでありますが、人間の場合は、他の動物とは異なって、「時間を所有」したり、「時間を超越」したりすることができるよう思われます。

人間が「時間をもつ(暇がある)」とは、さしあたりまず彼がある一定の時点において時間をもっていること、すなわち、彼がこの時点において「何らかの行為に対して自由であり、かくして彼が自由に処理しうる」ことを意味していると思います。

したがって、人間は自分の時間を正しく分割することを学ばなくてはならないと思います。無為のままに自分の時間に徒らに、無益に浪費してはなりません。また、多様をきわめた要求の圧力のもっとも重要なものと重要でないものとを区別し、重要なもののために時間をとっておくために、比較的重要でないものを無視することを学ばなくてはなりません。

「仕事」(die Arbeit)の時間のうちに、目的論的に強調された時間は一般に重く苦しく長く感じられ「遊び」(das Spiel)の時間は楽しいけれども経過が早く感じられ、酒に酔った銘酊時の時間は疾走するようであります。時間を全く気につけず、それを無頓着に流れるにまかせ、いわゆる「閑暇」(die Musee)の時間——たとえば温泉宿で親しい友と語り合うなど、時間構造の多様性には驚くほかはありませんが、何かに熱中し、没頭し、時のたつのを忘れるという「時間忘却」の体験の時間が、人間にとってもっとも幸福なのかもしれません。

「時間を厳守すること」(die Punctlichkeit)は、客観的な、超個人的に拘束する時間に関するもっとも重要な徳の一つであり、なかでも人間の共同生活の一つの徳であります。過度の「時間厳守」はもうそれだけで狭量と言ふべきではありません。

しかし、それにしても大正大学の教授会における Unpunctlichkeit はひどいもので、定刻に始まることはむしろ例外であるというのは、困ったことだと思ひます。

わたくしたちは、日常生活において、「時間との競争」という逃げ道のない困難さに陥ることをしばしば体験します。人間はつねに時間の永続的な圧迫のもとにおかれています。それに対して遅くなりすぎぬうちに生活をきちんと処理するようにと、人間に警告する死の脅迫が他の一切のものの背後にひそんでいるのであります。

「瞬間から奪いとられたものを、もとに戻す永遠はない」ということは、悲しいことであります。人間は、自分の課題に「時間の余裕を与えること」(Zeit zu lassen)を学ばなくてはなりません。

「自由にする (freilassen)」、「放任する (überlassen)」を意味する (lassen) とは、一体どのような意味なのでしょうか。

人間は行為者として、自らその行為のテンポを決めることができるときには、まだ比較的簡単であります。彼が自分の願望や努力とは無関係に、なるようにしかならぬような出来事にひき渡されている時には、本質的にもっとむずかしくなります。

忍耐 (Geduld) は、時間へのかかわりにおける偉

☆☆☆☆

大な徳であるという結論を、人間は甘受しなければ
ならないのでしょうか。

「時間と一致して (in Einklang mit der Zeit) 生き

る」という「冷静沈着」(Gelassenheit) な生き方
は、そう簡単にできるものなのでしょうか。

(つづ)

◎『浄土』表紙版画販売についての案内

好評の『浄土』誌表紙版画絵は、土屋正男先生のご好意を得て、豪華額縁に装丁して販売させていただいております。額縁代も含めて、金二五〇〇〇円というお求めやすいお値段で、季節観に溢れた芸術味豊かな版画掛物が購入できるわけです。どうぞ振替にてご注文願えれば幸いです。

また、大きさの方は、『浄土』表紙絵よりはずっと大きく、約20cm×30cm位の大きさですが、額縁の大きさでいえば30cm×50cm程の大変豪華な一幅となります。

なお限定販売のため、予定数に達しましたら、申し訳ありませんが、おことわりさせていただきます。しかし現在のところ、正月号より本月、十二月号までの在庫は充分にありますので、ふるってご注文願えれば幸いです。

(申し込み先) 〒102 東京都千代田区飯田橋一―一―六

法然上人鑽仰会 振替(東京) 八―八二二八七

◇◇◇ 想い出のページ ◇◇◇

『浄土』昭和十一年十二月号(第二卷第十二号)より抜萃

葦間の月影

(一)

このごろ、晩秋の薄い日ざしに、うつすりと庭の上を流れる白い水蒸気を、この現身の眼にうすら冷たく覚えながら、私は、書斎の机の上に一卷の歌集をひらいてゐた。

うき草の生ふる渚に月かけの

ありとは こゝに 誰れか知るらむ

これは、あの越の良寛の歌である。

その頃、すでに老齢に達してゐた良寛和尚は、越後国上山の奥深くに、小さな粗末な庵を結んでひとり棲んで



まのしょうじゅん
真野正順

ゐた。そうして時たま山を下り、食を乞ふて帰るさ、野畑の道に、村の童男童女たちと無心に遊び笑みつゝ、その老ひても消えぬ天真の童心を流露したのであるが、また夕日色づくと共に、独り山路をさしてとぼとぼと帰ってゆくの常とした。

おそらく、もう夕暮の途次のことであらう。

山陰の窪地に、少しばかりの水がたまつて、葦芽なぞが生ひてゐるところがある。さらさらと鳴る枯葉の音に気づいて、足許を見やると、ゆくりなくも、生ひ茂る葦の間に、きらきらと輝きながら、天上の月の影がうごい

てゐる。

思はず足をとめて、ちっと見入ると、その枯れ溜った葦の間にのこる、わずかばかりの水の面は、いまは冷たく銀のごとく輝き、煌々として天上に澄みに澄む月影をさながらにうつして、そのまゝ寂然として静まりかへつてゐる。

この山道の夜半に、いまは人一人過ぐるものとしてはない。時たま暗の中に、葦の穂をゆるがしてあるかなしかの風がまた暗のなかに消えてゆくばかり、この哀れに見捨てられたやうな乏しい水溜は、静かに見れば思ひもかけず、今は、天上の麗はしい光をたゞえ、この小さな水の面に、かの大空の壮麗なる世界は、さながら、残すところもなく込められ、その中は広く遠く、ひろく果てしなく澄んでひろがってゐるのである。

あはれなる野路の水溜よ。汝の淋しきすがたは、また我に似てゐる。人眼にふれず国上山の奥にちいさな草の庵を結んで、はかなく世を過す我れの心と汝とは、奇しくもまた似たるかな。その姿は、世の人の眼にもかゝらず幽かではあるが、こゝに、かの天上の月影は、おなじく牙々とやどつてゐるのであって、こゝに眼を留むる人

あらば、また限りなき大空の世界をその内に見出すであらう。

思へば、それは、たゞ汝れと我とばかり然うなのではない。おしなべて世の苦難になやむ貧しき人々の胸の底にも、また、この限もなき天上の光は秘めてたゞえられてゐるを知らねばならぬ。

かう思ひながら、茫然と良寛和尚は、その老ひたる童顔を白く月影にさらしつゝいつまでも、立ちつくしてゐたのであらう。

良寛和尚から、すでに六百年も溯るのであるが、法然上人の御法語の中にも、かういふ言葉が伝えられてゐる。

『たとへば、葦のしげき池に、十五夜の月の宿りたるは、よそには月やどりたりとも見えねど、よく／＼立ちより見れば、葦間をわけて宿るなる。妄念の葦はしげれども、三心の月はやどるなる』(法語抄 一〇五)
御弟子乗願のことばに依ると、故上人は、この譬喩を好まれて御法話の中にも、くりかへし用ひられたと伝えられる。おなじく上人もまた、かゝる葦間の月影を眺めて、しみ／＼と深く心に打たれ澄わたることがあつたに相違ない。

(二)

昼間はすがれた葦の葉に埋もれて、見るかげもない路
辺の葦も、夕さりくれば、おのづから、そこに清らかな
月影を宿してゐることが露はれてくるやうに、人の心も
またそうである。その外に現はれる姿によつて、必ずし
も、その人の内面の光を計ることはできない。

私は、よく、子供の生長などを見ながら感じるもので
あるが、自分の子になつて見ると、子供のこの頃の挙動な
どには随分氣にかゝるやうな不快なことが多く現はれて
くる。そういう傾向のだん／＼生いたつてゆく将来なぞ
考へてゐると、何とか早く、そんな性質は揉み消してし
まへないものかと苛ってくる。そして色々と叱言を言つ
たり手段を講じたりして見るけれども、それが却つて悪
い結果を招くやうで、妙にひねくれたりしてくる。そんな
事でいろ／＼してゐると、何かのはずみに、一寸した
局面をきつかけに、これはどうしたものか、思ひもかけ
ぬ良い性質が、急に伸々とあらはれて来て、その優しい
内質に却つてこちらが打たれてしまふ事がある。

こんな時の、はつとした嬉しさの中に、つく／＼思ふ

ことは、目前の挙動だけでは、その児の全体は決して極
めつけてしまふことは出来ないといふことである。子供
なぞの生長は、ちやうど鞠がころ／＼転がつてゆくやう
に、表を出し、裏を出しながら絶えず変化してゆくも
のであるから、決して、いま出てゐる性質だけでは、そ
の持つて生れた性質の全部を見ることはできない。それ
には、どうしても「永い眼」が必要だ。ながく辛棒づよ
く、ぢつと、その生い行く先までも凝視して待つてゐる深
い愛の眼が必要だ。そういうふものを用意してゐてやるの
でなければ、今しきりに変化してゐる子供は窮屈でたま
らない。

よく世間で云はれる、難しい親子の間に起りがちな喧
嘩なぞも一つはこんな処に胚胎してゐる事がないだらう
か。先妻の子を受取つた新しい母親にして見れば、やは
り優しく温かく、この哀れな運命の子を育て、やりた
く、それがまた、自分に課せられた神聖な務だと、真剣
になつて思つてゐることであらう。しかし、だん／＼育
て、ゆく間には、やはりたゞの無条件な優しさだけで
は、却つて、その児の将来のために悪い。時には、相当
の制御を加へて行かなければならぬことが分つてくる。

そう思へば、それだけ真剣に子供の性質や挙動などを注意深く凝視する。しかし、かうしてゐる間に、いつか、子供は常に鞠のごとくころがりながら変化するものであることを忘れてしまひ、遂にたゞ目前に現はれる性質挙動だけで、その全部をきめてしまひ、その対策を立てるやうになつてくる。

だが、子供がいま現はしてゐる挙動は、その子の持つて生れた性質の全部ではない。その事は、自分の子供の時にかへつて思ひ出して見ればよく分ることだが、子供は、絶えず表を出したり、裏を出したりしながら生長してゆくものだ。ところが、心苛つた親になると、ただ目の前の挙止だけで、その児をきめる。ちやうど、もうすっかり生長して動かぬ性格を完成した大人にでも対してゐるかの如き心をもつて子供を見てしまふ。それ故、子供になつて見れば、自分の或るとき、為した行動によつて、何時までも自分が見られて窮屈でたまらない。今はそんな気がしないことでも、何時までもこだわつてゐられるので、いつか心がうと／＼しく離れた垣の間に立つてゐるやうな氣になつてくる。

そんな事で、ずぶん真剣に、かつ強い愛情を用意し

て子供に対してゐる母親でありながら、その予期とは反対の結果を、その子との間に生じてしまふ事があるやうである。

子供を見る眼は、どうしても、永い眼でなければならぬ。やはり、この子の何処かには純朗な美しさが、かならず秘められてゐるといふ事を見ぬき、ちつと待つ「愛の確信」がなければならぬ。

愛とは、その人のどこかに秘められたる「良さ」をいつまでも確信してうごかぬ心である。

しかし、その「良さ」は、ただその人の外面より見るならば、ほとんどその片鱗をすら認めがたい事があるだらう。それは、たとへば、あの路辺の渚の野草に蔽はれた姿に似てゐる。佻しい枯葉に蔽はれて、道を過ぐる人の顧みることもない、その草の間にも、天上の月影は秘かに留められてゐるやうに、人をその内心の奥にたづねるならば、かならず、そこには清らかな天眞の光は留められてゐるのである。それを見るものこそまことによく、人を見る眼をもつ者といふことが出来るであらう。

(三)

この社会にあつて、その人の胸が、底まで冷え凝固つて、光の片影をさへ、そこに留めぬ粗鉄のごとき人も、もし在りとするならば、其人は遂に救ひ無き人であらう。然しながら、かゝる人は実には存しない。かくては、生きて行けないからである。

人の心の奥底をさぐり来れば、かならず、そこに気高き光が幽けく柔かく瞬いてゐる。しかしこの事を、人は我身に於てはたやすく領くのであるが、他人を見る眼に於ては、しばしばこれを曇らし勝ちである。日々の交渉葛藤のまに／＼一時の行掛りに躓いて、遂にその人の本来を見失ふことは余りにも我等に多い。そうして故もなき怨恨や憎悪をいたずらに我等の間に捲き起してしまふのである。

まこと人を見る眼は、その外形によつて蔽くところの「智」でなくて、見えざるを見るところの「信」でなければならぬ。人と人との結合が「信頼」に根ざさねばならなかったやうに、人をまことに見るものはあらゆる外形の行掛りを超えて、直ちにその人の内面の純光に直参するところの「信の眼」でなければならぬ。

真実の生活の基礎は信である。

かくて、我等はいつか宗教の門にと辿りついてゐるのである。

宗教とは、あらゆる外形をはぬのけて、かゝる月影の中に、この身を投げ入れ、輝くその流れに全身をひたらせて行くことである。すなわち、光の中において、この人生を見るものである。

唐の善導和尚は、信仰者の生活規範を簡潔に言ひ放たれた。

『慈心もて相ひ向ひ、仏眼もて相ひ看る』

仏の眼とは、やがて、この光において見ることである。すなはち、互ひの胸の奥底に湛えられたる限なき仏光を、互ひに見交しつゝ睦み合つてゆく生活である。

宇内に満つる輝やく仏光を信受する者は、やがて世の諸々の人々の奥にすでに深く照らされてゐるが、その光を影を見逃すことはないであらうか。かゝる光の中より見れば、こゝに在る我等はそのそれ／＼の身を以てかの崇き天上の月影を蔵むところの渚である。

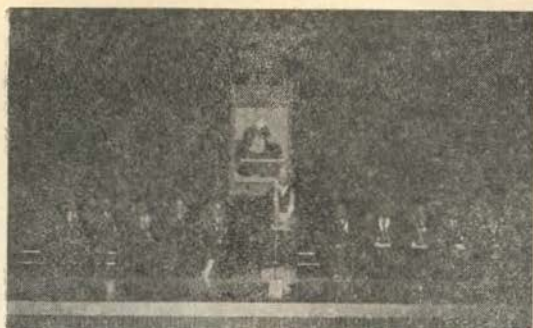
月影のいたらぬ里はなければども

ながむる人の心にぞすむ。(法語抄二六〇)

法然上人鑽仰会創立45周年記念式典

十一月八日(土)・於東京・田町 笹川記念会館

(記)
(念)
(写)
(真)
(ア)
(ラ)
(カ)
(ル)
(ト)



—第Ⅰ部・式典—

藤井実応増上寺御法主台下を御導師に仰いで、数そかな法楽が営まれた。



—藤井実応台下の御垂示—

会場に集まった四百人余の人々と一緒に、「一枚起請文」を唱和し、藤井御法主の御言葉をいただいた。



—法然上人鑽仰会代表・佐藤密雄博士の挨拶—



—記念公開座談会—



—創作舞踊「二河白道」—

（森爽先生主宰の≡月影会舞踊団≡
の熱のこもった演技に、満場の拍
手が送られた。）



—二祖対面
のシーン—



—第Ⅱ部・記念パーティ小景—

（120人余の人たちのご参集を得て、なごやかな小宴が営まれた。）

△ずいそう▽

大美術館ウィーン



曾^そ田^だ文^{ふみ}雄^お

(島根大学教授)

他人委^{まか}せの団体行動から、というのでもなく、通りすがりに一寺立寄る、ということでもない、乃至は盛沢山のスケジュールに追われて仕方なく、というわけでもないのに、ウィーンへ、面倒な入国手続を経た上でわざわざ見物しに来ながら、僅か三時間、飲み食いもしなければ何一つ買うでもない、我武者羅に歩き回っただけで引揚げてしまった者など、あまりいいものではないだろうか。筆者の訪問こそ正にそれであった。

大学の調査が狙いでミュンヘンに到着したのは、金曜夕刻のこと。御承知の通り、ヨーロッパは週休二日制を採る。為に、月曜まで辛抱して待たぬことには、大学が

開かない。土・日を如何に過ごすか。近辺には、ドイツアルプスなど、一日行程の観光地は多い。が、切角ならば、と土曜一日をウィーン見物に充てたのであった。

ところが、同行三名中、一人は一次旅券しか所持せず、これだけ滞在先が決められてあって、途中での追加、変更が利かない。「どうぞ行って来てください。市内をぶらついていきますから」と快く送り出して貰いはしたものの、御当人、単語など実によく御存知なのに、一向にドイツ語での会話を交わそうとはなさらない。「なるべく早く戻ります」と出発はしたけれども、「一人で大丈夫かしら」との心配がさきに立つ。

ウィーン空港で入国審査官から所持品提示を求められ、カメラ一つだけ、と答えた後、「何日滞在するのか」と尋ねられ、「今日中に引返す」といったら、早、正午まで一時間もない刻限ということも加わってか、クワツと目を剝いて呆れ顔を見せた。かかる手合いは、やはり少ないのであろう。ただ、「もう一人はどうした」と問われたのには驚いた。旅券に三人連れと記されているわけでもないのに、どうして分かったのだろう。日本人の筆者には想像もつかぬ程に、良くいえば身分保護、悪くいうなら手配書の如きものが訪問する先々に配られていたと思えない。あらかじめ文部省からは「領事館に泣きつくな」と釘を刺されていたこととて、孤立無援の心境でいたのが、その実三人一まとめで常に監視されていたことになる。

「五、六千円あれば充分だろう」と相談まとまり、五十マルクだけ両替したら、百ペーニツヒ札三枚に硬貨を幾らかくれた。空港バスでターミナルのヒルトンホテルへ。バス代払ったら、ペーニツヒ札一枚が消えた。帰りの分一枚を確保するなら、残るは一枚きり。これじゃ遊覧バスどころかと、血眼で四方を見渡すものの、並び建

つ銀行はシャッターが下りているし、ホテルの両替口もカーテンが引かれたままである。大韓航空は乗入れており窓口があるのに、日航のそうでない点がつくづく恨めしかった。

偶々ウィーン詰めの日商社マンらしいのに出くわしたものだから、ひよっとしたら二人で百ペーニツヒ分だけ乗せる遊覧バスでもあろうかと、叶わぬ望みとは重々承知の上、遊覧バスの発着場を尋ねたら、親切にホテルの案内所で聞いてくれた。けれども、傍でやりとりを耳にするに、『遊覧バス』なる単語が思い浮かばないのやら、単なるバス乗場を聞いているらしい。これじゃあ話にもなるまいと思っていたら、案の定「何処でも乗れるそうです」という通訳が戻って来た。そんな遊覧バスなんて聞いたことがない。市バスだって、いくらウィーンであろうと、乗場は一定しているではなかるうか。一応礼は申して別れたものの、ホテルからまだ一歩も踏出していない。同行の友は「いっそ此処から眺めるだけで引返そう」なんて情ないことすら口ばしる。しかし、何としても勿体ない、と暫時歩いてみることにした。頼るものとしては、利用客の誰にでもくれるウィーン空港新聞

に刷込まれた、縮尺表示すらない、ちゃんな市街略図の一枚だけ。

まずは市の中心とおぼしい聖ステファン教会の尖塔を目印に進む。教会では折しも正午のミサの真っ最中。だが見とれている閑なんてない。地図には川が一本画かれそれにドナウと記されている。そこまで行けたら思い残すことはない、と街路に舞戻る。凡その見当が的中し、間なしに河にかかる橋上に立てた。嬉しいのなんの、亡母が愛した『ドナウ河の漣』のメロディーさえ脳裏をよぎる。写真を撮り合いつつ、橋名をマリア橋と知った。青きドナウの面目を其処に見出すというカーレンベルクからの眺望には及ばぬにしても、とに角、遂にドナウまでやって来たのだ。『町人共さまを見る』の心境だった。ところが、これがとんでもない間違い。帰る機上で気づいたのだが、二千メートルばかりの上空から見下ろすドナウ河では、汽船が幾艘もの小船を曳航しつつ湧っていく。揚子江に例ありとはいえ、あんな大河に橋がかかっているものだろうか。あの折見に橋の数は、三本や四本ではなかった。おまけに、一分そこそこで対岸まで行けた……。それは、実はドナウ河ならぬ、その支流に当るド

ナウ運河だったのである。

が、その時はまだ気づいていない。浮き浮きしながら河畔沿いに歩を進めるや、苦もなく隣る橋まで達してしまった。地図で見える限り、相当距離がありそうなのに、どうも近すぎる。一旦は、橋全部が記入されていないのでは、と疑ってもみたが、紛れもなくザルツツールである。実際の通りの具合と地図とを引比べているうち、はたと思いついた。「我々は、東京やパリみたいな大都会の感覚でウィーンを考えていたのだ。だから地図を見ても、通りと通りの間隔など、ひどく距離がある如く受取っていたわけだ。ところが、眼前にある二つの通りと地図とを照らし合わせるなら、あんな程度の間隔、僅かな距離でしかない。これなら、ホーフブルク宮まで歩いたって知れている。さあ進もう」——この時ほど活気が戻って若々しくなった経験は、ここ十年にみないことだった。何しろ地図が地図故、実際の街路を画かれている仮に進むことは至難のわざ。それでもどうやら王宮公園に無事到着でき、モーツァルト記念像を仰ぐ。確か六歳だった彼が転んで王女に助けられたという、若かりし頃遠く思いをはせた王宮がつい目の前にある。マリア・テレサ

の派手で大きな像を見上げては、ソプラノの名手でもあったこの女王あってこそ、楽都として今に榮え、数々の作曲家も居を求めたのだ、と羨ましい気持ちさえ起った。だが、これを写真に収める気にはならなかった。

ミュンヘンのアルテ・ビナコテイクと双壁に称せられる美術史美術館に入ろうとして、失敗した。入館は午後一時まで。十分間遅れただけなのに、扉は押せど叩けど一切応答がなかった。いま通りがけに見てきた出口は閉っていたのだから、と未練が残る、出入口乃至窓とみるや、片端から押しまくって試みたが駄目。

ミュンヘンに残した友のことも気がかり故、大学のあつた方までは足を延ばさず、旧城壁跡に沿っているといわれるリンクをヒルトンホテルに向って進む。ゲーテ記念像を過ぎた頃、日本の会社名を掲げたビルを幾つか見かけた。勿論、中に人影はない。それどころか、王宮とか公園あるいは先述した教会辺を除くなら、街上に人影というものを殆ど見かけなかった。

市立公園に入つて、今にも動き出して演奏せんばかりのヨハン・シュトラウス像を眺めているうち、もしこれが他の市街だったら、か程にまで周囲と融和できた付

いとなるものだろうか、と考え始めた。もしかしたら観光客も数える程度の至って静かな公園だからか、と思つたりもした。けれども、マリヤ・テレサの像はしばらく置き、先程のモーツアルトやゲーテの場合だつて、決して鼻につくような印象は受けない。かかる雰囲気こそ、ハプスブルク王家が遺した功績と見做してよからう。ここに至つて、伝統の重みなるものを身にしみて感じたことであつた。

池越しにシュニベルト像を見やつては、市電の切符ならぬ航空券をまさぐりつつ、ドルドラ程の才能さえあつたらなあ、と『スーベニール』の曲を思い出し、その楽才に改めて敬服の念を抱きもした。

切角ウィーンまで遙々来ながら、レコードでしか耳にしたことのない、彼の交響楽団はおろか、歌劇にも少年合唱団にも、すべて生の音楽には一切触れずじまいだったし、既述の通り、教会を別にするなら、美術館、博物館、記念堂の一つにさえ踏込まぬまま引揚げはしたものの、午後二時過ぎ、ジェット機が滑走を始める折には、何だかとてもなく大きな美術館をめぐる終った時のような気分になつていた。

浄土句集



朝点前葉蓋に光る露の玉

東京 阪入 等達

評 露の玉が葉蓋に光っている、朝の点前はすがしく心地よいものである。席にっている娘さん達は美人揃いならん。

山形 松田 允子
地獄変子等に見せ説く和尚かな

評 閻魔堂に地獄変が進ねまつらん。お詣りの子供達に、和尚が石より重い罪の十王図を説いているのである。

東京 新井 新生
新盆に集まり愚痴のこぼし合い

評 お盆に詣で集まる人々は、この仏が生

一田牛畝選

きていたらと愚痴のこぼし合いだ。

秋分の日の名月のおがまれず

福岡 荒牧 還愚

評 今年秋分の日と名月とが重った。こんな年は珍らしい。然し待っていたが、曇りで拝むことが出来ず残念至極。

福岡 高良 慈風
芒原筑前筑後の境石

評 二つの国の境には石標が建っている。これは徳川時代からであらう、あたり一面ひろびろと芒原である。

東京 吉原登起子
伴に日々おだやかに昼寝かな

東京 阪入志津枝
星空に音ばかりなる遠花火

京都 安藤 寛
珠数返さぬ子に当惑の盆の僧

福岡 永江 隆説
流水を集め鯉焼く浜辺かな

群馬 島津 か寿
夜々ひとり虫をさきつつ眠りけり

山形 松田 光誓
十夜僧けふ結願の髭を剃る

福岡 江上 樺村
小望月出るらし雲のしらみけり

福岡 三牧 重利
食って寝ていよいよ肥る九月かな

福岡 上滝津弥音
銀漢や漁火ゆらぐ平戸沖

山口 上野 明達
秋深し墓の芝焼く僧一人

東京 田中 秀代
どんよりと藤の実垂れて雨催ひ

東京 吉田ゆきゑ
まま事に遊びし頃や赤のまま

東京 真野よし子
祖母の世の帷子使う術もなく

福岡 稲永 新
盆陀し仏を守りて老一人

山形 佐藤 声堂
湯上りのたもとを抜ける秋の風

東京 小笠原香祥
咲き誇る合歡の花越し伊豆の海

三重 森 静枝
散る木槿また咲く木槿庭を掃く

埼玉 佐久間愛子
秋の灯を消して仕事を終えにけり

東京 栗原やえ子
廃屋をアトリエにして著我の花

三重 山田 うた
敬老日娘等と睦みて開む膳

山梨 青山富貴江
秋日和名人戦の老二人

東京 末常てる子
梅雨晴間竿竹売の声響き

福岡 高良 幸代
手庇の道連れ楽し稲の花

大分 丹羽 難中
菩提樹の緑蔭なせる二祖の廟

神奈川 松本せつよ
我影の歩道に映り老の秋

福岡 服部 光代
送り火の風に消えゆく丘の墓

福岡 権藤みきを
もみじの掌合わす子も居て魂送り

東京 真野 竜
白壁の蔵と並びて枇杷熟るる

東京 細田 初枝
城趾に栄枯偲ふや秋の蛇

一田 牛畝
除夜の鐘撞きに五濁の爪を剪る

東京 鈴木 葉子
香水や銀座並木のすれちがい

山口 三井 寛静
書き足して孫の画帳の秋となる

①句②会③だ④よ⑤り

鬼怒川吟行記

しお やま さん きゅう
塩山三九

(俳人協会会員)

天光院俳句会は毎月第一水曜日、天光院庫裡で楽しい例会を開いており、折に触れ吟行を試みているが、秋彼岸の行事も終った十月上旬一泊旅行をすることに衆議一決。目的地は名にし負う鬼怒川温泉グランドホテル。

十月八日午前十一時浅草発、東武の誇るロマンスカー、連衆八名。天光院檀徒会長新井新生が会長兼会計兼進行係として座席指定券を買い整え、当日は一時間も前から改札口で一行を待ち構えていた。

刻を待つ浅草駅や秋の旅

新生
氣遣われていた天気も朝から深い霧、成田空港着陸不能とか。発車の頃もまだ隅田川に薄々と霧がかかって、「これ晴るる徴なり」との頼山陽の文章を思い出した。早速用意の茶菓が配られる。車中忽ち歓談の渦、この

中ですでに何句かの名句ができていた。わが句会も満更でないといひと安心。

思い出多い関東平野を北を指し、ひた走る。

大利根の岸に一輪彼岸花

大利根を渡る秋日や旅心

やえ子
よし子

下今市で停車、日光観光の外人一行が下車、鬼怒川駅にはホテルを斡旋された鈴木葉子さんが、赤いスマートな彼女の愛車で先着、にこやかに出迎える。南浦和から二時間余で来てホテルに寄って手配確認済みとのこと。

まづロープウェイで湯の町を大観する丸山に登ることとなる。葉子さんの車とタクシー一台に分乗、山麓まで。ここに一段高いところに中央に護国神社、やや小振りの温泉神社が並んで鎮座します。ロープウェイは片

側四名ずつの座席があり、一行にちょうどよいスペース。がまづみの花が美しい。車掌は乗らないが心配なくと掲示してあるが、駅員に外からロックされて心細くなる。然し発車の一瞬に色鳥を見つけた俳人の眼に驚く。

発車ベル色鳥斜に横切りぬ

香祥

無事山頂駅到着。ここに猿五十四と鹿三十四とを飼っている。周囲を金網で囲ってある。猿はいたずらをするのでご注意と書いてある。早速キーンと悲鳴、付添の監視人が猿をたしなめたので猿群はすこすこ退散。鹿は人懐こく餌に鼻を寄せて来る。

掌を鹿に存分舐められし

三九

猿山に餌ねだり寄る鹿の群

よし子

展望台で大景一見の後、奥の院まで歩いて一分と聞いて勇を鼓して登る。温泉神社の奥の院まで赤い鳥居が続いている。

この先は小さな社木の実踏む

葉子

登りつめばと一群秋桜

葉子

高原を夕日の照らす芒かな

登起子

すくすくと伸びて芒の穂のそよぐ

新生

宿に着いて早速一浴、大風呂には浴槽が五つもあり奥

には湯滝がかかりここが最も熱い。三室に分宿、男性軍の部屋は藤壺という。食事前の一と刻を三々五々庭をそぞろ歩く。

一と筋の秋日おだやか峽の町

幸子

宿の庭水音走り薄紅葉

登起子

木犀の甘き香りのひたひたと

てる子

夕食は大広間の中央をアコーディオンカーテンで仕切った二組の舞台付の宴会場の一つで、まづ清水支配人の歓迎の挨拶があり、今売出し中の東芝の歌手天のあかね嬢の独唱の幕が開く、大柄の美少女で声量があり浅草の祭の唄とて大拍手であった。私は次の句を短冊に書いて渡して、彼女の前途を祝福した。

天のあかね大江戸情緒祭唄

三九

食後別室で型通りに句会、賑やかに終って歓談に入るとき、天光院住職真野竜海師、俳号竜さんが大学の会議を終えて駆けつけて来た。明日昼には東京に用があるので、風呂に入って寝るだけの旅となった訳で誠に恐縮。

句友待つ宿へ夜寒の道急ぐ

竜

湯の滝の音に更けゆく秋の宿

竜

鈴虫の集く夜道を宿につく

竜

嶺々昏れてせせらぎの音ちちろ鳴く

やえ子

それぞれの旅にしあれば秋思ふと

幸子

語り継ぐ鬼怒川の温泉の夜長かな

香祥

静けさの秋の夜空に星一つ

てる子

一杯のビールと奥の院詣でと句会の疲れでぐっすり眠れた。雲一つない大秋晴の朝が明けた。部屋を出ると突然清々しい郭公の啼き声、フロントで聞けばお客様サービスのためテープで流しているとのこと。風呂を上ると番茶のセットが出ており、洗面台には化粧具が整っている。この三つのサービスには感心。

十時発帰京の竜海師の帰京を見送って、鬼怒川ライン下りに出発。駅の前から石段を河原まで下る。船は十隻位おり先着順で十五人宛乗せている。船頭が前後に一人ずつ、巧みに櫓を操る。お客が乗り次第船は岸を離れ本流を下り始める。岩の上に写真屋が立っている。舳の船頭の号令一下、一同手を振る、この写真は申込者に着払いで送ること。

水は澄んで底の石まで透いて見え、魚の影もちらちらする。時に岩が迫って急端となり、船は跳って飛沫がかかる。兩岸は切り立って紅葉の十一月上旬はさこそと思

われる。

ライン下り水しぶき立ち鮎走る

やえ子

白鷺の青空よぎり水の秋

よし子

秋風に頬なぶらせて川下る

葉子

杉襖秋の光の裏表で

幸子

さまざまの岩次々に川の秋

てる子

水光る淵淀みけり鬼怒の秋

香祥

顧る鶏頂山の水の秋

登起子

沈みゆく落葉の早き水澄めり

三九

約六キロのコースを無事終点の大瀬に着く。ここで船はロープで街道に引き上げられトラックで、乗客はバスで駅前に帰される。

ちょうど昼飯時なので手頃のレストランの二階の和室に寛ろぐ。二時四十分の浅草行の出発まで句を練る人、買物に行く人、できた句は乗車までにまとめられ一同やれやれと胸撫でおろす。あとはビュフェに珈琲を注文、また歓談ひとしきり。浅草も間近い頃おでんが配給される。来月は紅葉の高尾山へ一日吟行の声が上って幹事で具体案を立てることに一決。めでたしめでたし、一同お土産の詰った袋を提げて浅草で解散、夫々家路についた。



念佛ひじり三国志

(主九)

―法然をめぐる人々―

寺内大吉

挿絵 松濤達文画

一

住蓮たちは東山、吉水の禪室へ登り着いた。折から下ノ房の縁先には数十人の善男善女が群れたかっていた。縁先に腰をおろす。地べたに坐りこむ。彼らを取り巻いて立ちはだかる。みんな思い思いの姿勢であった。

吉水禪室における法然の説法風景はつねに自在、奔放である。いっさい格式ばらない。権威づけを、意識して避けた。主体はあくまでも内容だった。

聴問者はいかに正しく法然の言葉を吸収するか。法然自身も膝をまじえて一人びとりに語りかけるような態度

であった。

人垣の背後に立った住蓮は、松虫鈴虫という美姫二人の姿を求めた。聴衆のなかに発見できなかった。

ちょうど説法が区切りへきたのか、法然は俄かに口調をあらためた。いちだんと碎けて、説話を語りはじめた。

「むかし天竺の国にな、クーラン(罽闍)と申す女人がいた。夫ある身だったが仏弟子の説法を聴いて出家の功德を知った。夫から逃げて精舎へこもった。妻を追い求めた夫はやがて探がしあててな、連れ戻したのじゃ。無理に元の妻に戻してしまった。いちど落飾した髪もまた生えてきて、夫の求めにも応ずるようになったのじゃ……」

法然秘伝はこのくだりを

髪ヲ生シテ、モトノゴトク女ニナリス。ソノ罪ニ
モ限ラズ一切ノ罪ヲ造レリ

と書いている。

住蓮のかたわらに立つ少年は、このとき肩をゆすつて笑った。

「あの方が法然さま？」

「そうだ」

「もっと、こわいお方だと思っていました」

「自己にはきびしいが、他にはおやさしいお上人さまだ」
法然の話は続く。

ひとたびは出家したが、結局はモトのモクアミに戻ったクーランは死後、閻魔さまの前に引き出された。裁きを受けて地獄へおちた。

「……地獄の大釜のなかへ投げこまれたんじや。ところがその大釜が俄かに割れてしまった。なぜだか、わかるかな、皆の衆」

「——」

前号のあらすじ

一二〇六年、建承元年の「建永の法難」は、いうまでもなく、法然上人を四国土佐へと配流の身に追いつめた。専修念仏禁止の大法難であった。いわゆる安楽房違西らが死罪に処せられ、念仏の法門は大打撃を受けたのである。若き念仏行者住蓮もまた、その不幸なでき事の渦中であって、悲しくも命を断たれたのである。この事件は、もちろん南都興福寺を中心とする旧仏教側の強い反発から起った念仏禁止の発令であったが、実はその背後では後鳥羽院をめぐる朝廷の深い政治的思惑があったのである。薄幸の女人たち松虫・鈴虫の悲劇を誘ったこの法難は、確かに、法然浄土教がその出発に臨んで受けた、最初の苦難であったが、その中で「南無阿弥陀仏」と唱和する念仏の声は、日本の津々浦々へと浸透して行ったのである。

聴衆たちはきょんとしている。

「いったん出家して、念仏を信じたクーランだ。阿弥陀さまのお慈悲で極楽へ往生できる。さあ、このお釜から出なさいと阿弥陀さまがクーランの手を引っばる。すると、ほかの罪人どもも念仏を唱えながらクーランにぶらさがる。みんなでやつさもっさするから、とうとう大釜が割れてしまった」

地獄の大釜が割れて、罪人どもがぼろぼろとこぼれ出

＜地獄の釜＞



るさまを思いえがいて、聴聞の衆はげらげら笑った。そのどよめきを掻き分るようにして法然は言い切った。

「阿弥陀さまのお慈悲はな、たった一度でも出家した者には、またその者にすがって弥陀の御名を唱える者は誰でも極楽へ救って下さるということじゃ。出家することが如何に大事であるか、これでわかるじやろう」

みんなはいちようにうなずいた。

なかの一人、烏帽子をかぶった下人風の男が立ち上がって声を発した。

「その出家ですが、どんな手順が必要なのですか」

「手順……」

「どのような修行をし、どのように学問をつんだらよいのでしょうか」

「修行も学問も要らぬ。ただ念仏だけを唱えなさい。あとはこの法然が剃度をしてあげる。それだけでよろしい」

「この髪を削り落されるのですか」

下人は烏帽子の下の髪へ手をやった。

「真似だけじゃ。剃刀をあてるだけじゃ」

「全く髪は切らないのでございますか」

こんどは狩衣を羽おった中年の女性が念を押してき

た。

「そのとおり。有髪のままでそなたは尼になれる」

「そんな尼が……」

疑問を彼女は投げかけた。

「形ばかり如何に尼となろうとも、心が欲念にみちた女性であったら何にもならぬ。たとえ有髪であろうとも、

阿弥陀仏への信仰を唯一無二の生き甲斐と信じられれば、それだけで立派な尼じゃ」

「いつ、そのお剃刀を頂けるのでしょうか」

「いつ？ さよう、今夕ここで日課の念仏がある。それに加わりさえすれば、希望する者には剃度の儀をあげて進ぜよう」

法然はいとも淡白にこたえた。

「このあと、間もなくですか」

狩衣の女性は声をふるわせた。

「なかへあがつて待っているがよい」

説法を終えた法然は音吐朗々、念仏をとなえた。思わず聴衆たちも唱和した。

法然は下ノ房から姿を消した。

「法然さまの、お剃度とはそんなに簡略のものなんです

か」

少年は美しい眸の芯に、やや当惑げな光りを投げてたずねてきた。

「今もおっしゃるとおりだ。専修念仏では形式よりも信仰が主体となる」

「先ごろ法然さまの御手で出家なさって大宮内府さまもそのように……」

少年は内大臣実宗のことにふれた。

「いや、大宮内府の場合はな、古式にのっとっている。

法然さまは説戒なさっただけで、剃刀を使われたのは仁和寺の法印だ」

藤原定家の日記「明月記」はその岳父にあたる大宮内府実宗の出家を「法然房戒師、法印剃り奉ル。実信、被物ヲ取ル……」と書いている。法印とは実宗の弟で仁和寺の阿闍梨公性であった。

当時、法然は多くの庶民大衆を念仏ひじりとして出家させたが、男性は「入道」であり女性はただの「尼」であった。いずれも有髪のままで仰々しい剃度など実施してはいないのである。相手が貴族の場合、必ず剃度僧には然るべき僧位を持った者にゆだねている。そのあたり

法然は「天台沙弥」というおのれの身分を逸脱することがなかった。

聴聞の男女たちは散っていった。狩衣の中年女性だけが居残った。

住蓮は下山してゆく男女たちと入れ替るように吉水の台上へ姿を現した人影を注視した。先頭に立ったのは安楽房であつた。そのあとに狩衣をま深くかぶった二人の女性が従っている。

「松虫さまたちです」

少年は言い残すと、彼女らの進路目ざして駆け出していった。

住蓮も眼路を安楽房の一行へひろげた。

狩衣がおおわれているので、顔の輪廓は定かではなかった。でもきらびやかな狩衣の色彩、それが描きとる優雅な姿態が、今までこの中ノ房前に群らがついていた下民の女人たちとは別人種であることを端的に明示する。

だが、住蓮の視線はすぐに美女たちからそれていった。彼女らを出迎えるために走っている少年のうしろ姿にそそがれている。腿立ちの下に覗く白いふくらはぎや形のいい尻の丸味を凝視していたのだ。

何を見ている！

住蓮は自らをたしなめ、頬を紅く染めてしまった。

二

ソモソモコノ二人ノ女人ノ容貌ヲ言エバ、翡翠ノカンザシナメラカニ、蟬娟ノ粧オイ静カナリ。芙蓉ノマナシリ、ソヲ盲目ニシテ一度咲(エメ)バ百ノ媚ヲナス……肌ハ白雪ニ似タリ。腕ハ玉ヲ論(サト)シ、齒ハ貝ヲフクメリ。言葉少ナフシテ声ハ柔ラカニス。綾羅ヲ身ニマトヒ蘭奢ヲ衣ニ薰シ……

云々、と律師隆寛の「法然秘伝」は松虫、鈴虫の美形ぶりを描写している。現代の美意識では捕捉しがたいが、最上級の美女だったのであろう。

今その美女たちは法然の面前にかしづいている。法然の語る説戒を一語も聞き洩らさじと耳を集める。

彼女たちのかたわらには、さつき説法の中からそのまま居残った中年の女人もいた。つまり法然は、身分の高下によって説戒剃度を差別したのではなかった。一家家

の娘も、主人の恋人もないのである。迷える罪深き衆生の一人であった。

説戒を終えた法然はかたわらの門弟をかえりみ、剃刀の仕度を始めさせた。

「昼の説法でも申したとおり……」

と、法然は中年女性にふり向いて専修念仏者たちの剃髪儀をこと詳しく語った。僧尼令による「尼法師」となるのではない。在家者の「尼」である。だから落飾もほんの真似ごとだけだ。

「しかし、形式はかりそめであっても、真意は尼法師より深い信心で満たされていなければならない。心の落飾じゃ。心にまつわりついておる煩惱の髪を払い落とすのじゃ。信心の尼となる」

「わかつておりまする」

下民の中年女性は、敬虔な態度で黒髪の頭を法然の前へさしのべた。軽ろやかな手さばきで剃刀を用いると、その黒髪が二すじ、三すじ女性の膝へ落ちた。

「戒を授ける」

法然は言った。

「はい、つつしんで……」

「常住坐臥にお念仏を唱えること」

「はい、なむあみだぶつ」

「守れるね、この戒を」

「守ります」

きわめて短時間、簡素をきわめた剃度式であった。

法然は松虫と鈴虫の前へ座を移動させた。

「あなた方も出家を決意されたそうで、今のことはご承知ですね」

「はい。安楽さまからとくとうかがってまいりました」

十九歳の松虫は、きっぱりとこたえた。

法然はちらり下座に控えている安楽房を見やった。なごやかなかに、ほんのひとすじだが鋭い光りが混っているのを、住蓮は見逃さなかった。

この鋭い光りは、いったい何であらうか。

住蓮の胸に、その後ずっと執拗な疑問となつて残った。非難か、問いかけか。それとも確認であつたのか。

松虫と鈴虫にも前者と寸分変らぬ剃髪儀と授戒がおこなわれた。

松虫たちの濡れたような漆黒な髪は、いささかも乱れなかった。二すじ三すじを落飾しても髪かたちが変わりよ

うもない。若い彼女たちの黒髪は豊富すぎる量であった。

「この髪は如何いたしましょうか」

先に済ませた中年女性が、おのれの剃り落した髪を掴んで法然にきいた。

「お仏像を持っていれば、その胎内に納めてもよろしい。何なら紙に梳く材料にしてもかまいませんよ」

法然の答えは甚だ冷淡であった。

落飾した髪の毛を有難がったり、こだわるのはそれ自体が「執着」だ、と言いたげである。

この髪に関しては「百四十五箇条問答」——法然が日常生活に与えた指示を問答形式にしたもの、その中で明記されている。

髪を生やしたままの亡骸（死体）は仏たなり得ぬのではないか、という問いに法然は「髪の有無によるものではない。念仏を唱えたかどうかが問題である」と法然はこたえている。

念仏者が神社へ参詣するのは？

さしつかえなし。

——酒、飲むは罪にて候か。

——まことには飲むべくもなければ、この世のなら

い。

と、柔軟で現実的な生きざまを説く。

——忌みとは？

——仏教には忌みということ候わず。

忌み、呪術、たたり思想を断固として否定する法然の面目躍如たるものがある。この国の中世へ精神の光明を投げかけた革新者の姿である。

女人たちの落飾、授戒が終ると、吉水の禅室は俄かに活気づいた。おびただしい数の念仏ひじりたちが登頂してきたのである。

格別の行事があるわけではなかった。巷で布教伝道に明け暮れていたひじりたち、夕べがくると師法然のもとへ集り、同声念仏に励み夕餉を共にし、師の法話法論に耳に傾けるのが毎日の慣らわしであった。

「また、あとで御目にかかります。お母さまはお預けしてまいります」

少年は住蓮の面前へきて丁寧に挨拶した。

「どこへ？」

「はい、松虫さまたちをこの向うの青蓮院まで御案内申し上げます」

「青蓮院で何かあるのか」

「無事に法然さまお手ずから出家の素懷を遂げられました。日ごろお世話になっている青蓮院のご法印に報告致さねばなりません」

少年は練達した寺世話人みたいな口をきく。

松虫たちをみちびいて禅室を立ち去ってゆく。此処へ連れてきた安楽房が黙過している。あらかじめ定められた行動なのであろう、と住蓮はそれ以上深くは追究しなかった。

「これは母者人」

と、彼らを見送った安楽房は、居残った住蓮の母親に気づき、久闊を叙している。すでに顔馴染みなのである。老母はしきりと今夜の別時念仏会を期待する言葉を吐つた。

「ところで、あの姫君たちとはどこで？」

母との会話に区切りを見つけると、住蓮はさっきから聞いただそうと思ひ續けてきた話題にやっと触れることができた。

「仁和寺の母公さまから頼まれて、お連れしたのだ」

安楽房は余り気乗りのしない返事をする。

「仁和寺の母公さまが」

「あそこの女房たちに六時礼讃を教えているのだが、先夜あの姫君たちも加わってきて今日のことを依頼された」

「ただ、それだけか？」

「それだけだ。何かあるのか」

「いや……それで出家する動機は？」

「よくある諸行無常じゃよ。何でもあの二人、同時にひとりの異性に想われているそうで、妍をきそって同じ男の関心を求める。そんな生き方がたまらなくなったという」

「その異性が誰だか知っているのか」

「知らん」

「主上のきみ——」

「そうだったのか、……」

「どちらも一条家の女房でな」

何のことはない。安楽房は何も知っていないのである。未知な相手を法然のもとへ連れてきて授戒させる……安楽房らしい軽率さと言えるであらう。

しかし、一人でも信者を増やすことが専修教団の急務でもあった。あながち安楽房の軽率さは責められない。

すでに夜も更けた。黒々とした獅子カ谷の樹林を吹きぬけてゆく夜風の脚音が、ごうごうと凄まじい。

闇の山腹に一点の灯がともる、精舎の所在を明らかにしている。

外気の冷めたさに比べ精舎の内は熱気でむれかえっていた。男女は声をふりしほって六時礼讃をうたい続ける。一列になって堂内をぐるぐる歩きまわる「行道」をくりかえした。

先頭をゆくのが安楽房だった。行道ばかりでなく、彼の高音美声は大衆合唱のリーダーとして全くふさわしい。住蓮は列中の半ばに位置して助音をつとめた。

住蓮は精舎の入口ばかりを気にしている。東山で別れた松虫、鈴虫、それとあの少年童子はどこへいつてしまったのか。獅子カ谷の別時念仏会への参加をあれほど熱望していたのに、さっぱり現れないのである。

少年に誘われてきた住蓮の老母はすでに引揚げてしまった。制限もおそく、たまたま市中へ帰る二人づれがいたので同行してもらった。

青蓮院への挨拶にそれほど手間ひまがかかのか。所詮は若い女人たちに深夜の他出は許されぬことだったのかもしれない。

鋭い一塵の風脚が堂内へ踏みこんだ。正面扉が外側からひらかれたのだ。三つの人影が立ちはだかった。

まぎれもないあの美少年だ。あとの二人、松虫、鈴虫なのであろうか。

即座に断定できなかったのは、二人が吉水で見たときとがらり一変していたからである。

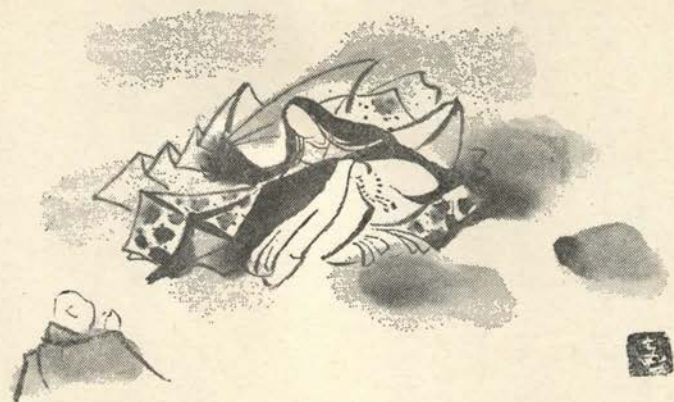
すでにあの十二ヒトエは脱ぎ捨てていた。粗末な白小袖を着こみ、墨染めの法衣姿だった。頭からすっぽりと黒い頭巾をかぶっている。頭巾の平板な丸みは、完全な落飾を物語る。

「おそくなりました。青蓮院で意外に手間どりました」と少年は報告する。

未だ六時礼讃の「行道」は継続されていた。住蓮は彼らを堂内の片隅に坐らせて、少年からその後の経緯を聞くことにした。

青蓮院の法印で一条家出自の僧は、松虫たちの出家を知ると、そんな中途半端な落飾ではならぬ、と言いだし

＜松虫・鈴虫の落飾＞



た。法印自ら剃刀を取り、番僧をしたがえて仰々しい剃度式を執行したのだった。

「法然ご房の意図は踏みにじられた、というわけだ」

住蓮の反論を、少年は世慣れた口調でかわした。

「あの方々のような姫たちには、真似事だけでは済まされなんでしょう。出家するか、俗人にとどまるか、明確にしなければなりません」

そんなものかもしれない、と住蓮は納得しないではおれなかった。何と言っても貴族社会の慣習にはうとい住蓮である。

「それで、私たちはこのあとも一条邸へ戻られるのか」

「尼の身でそのようなことができましようか。尼僧としてゆくべき所を、すでにきめました」

「どこかな」

「当然、寺です。紀伊の粉河寺が適当かと存じます」

「紀伊の粉河寺補陀落信心の寺だな」

紀井半島の海辺にある隠棲の寺である。補陀落信心とは、生きながら「殯がり舟」に乗船し補陀落浄土の海に身を沈めて往生するという信仰である。

ごく最近では平家の公達で、屋島の戦陣から脱走し平

家の再興を謀った平維盛が志やぶれて、この寺から補陀落渡海に出て果てたとつたえられている。

「姫たちもお覚悟は……」

住蓮は松虫たちの頭巾のなかを覗きこんだ。

十九歳の松虫、十七歳の鈴虫。その白透な顔面はいっさいの動きを示さなかった。尼という世捨て人に徹した無感動であろうか。それとも目まぐるしかった現実、ただ当惑したためであろうか。

「松虫さまたちはご自分で粉河寺へゆくことをご決心なさったのです」

少年が引き取ってこたえる。

「そなたは十五歳の童子だと言うが、何でも承知しているのだな」

ちよっぴり皮肉の針で刺したが、少年は微笑むだけで受け流してしまふ。

「行道」は小休止することになった。

安楽房は彼らのかたわらへたき、住蓮はことの経緯を告げた。だが、このひじり、意外とのん気なのか神経が野太いのか、強く反応してこない。

「どうせ出家するからには……」

とことん道を突きつめるべきだ、などと言う。

「仁和寺の母公から、これほどまでの出家を聞いていたのか」

住蓮は念を押さずにはおれなかった。夕方、授戒の席で彼女たちは法然流の落飾を安楽房から教えられてきた、と明言したいたからである。

「これほどまでも何も坊門のお局からはただ東山での出家を依頼されただけじゃ」

「よろしいのかな、このような仕儀に至って……」

住蓮の尖鋭な政治感覚には、この予期もしなかった事態が不安でならなかった。どこかに異がひそんでいるようなのである。

「ご先達。行道を」

再開しようか、と年若いひじりが促してきた。新客入来、それも眉目うるわしい尼僧たちなので、ひじりの気分は上ずっている。

「もう灯心が尽きようとしているではないか」

と、安楽房は正面の弥陀三像を指さした。唯一つの光りである灯心の残りも心細かった。

でも若いひじりはひるまなかった。

「月が出てまいりました。灯心が落ちて明るいですよ」
いつか堂外の木枯らしは吹きやんでいた。風がおさまるにつれて東山の夜空に月があらわれたのだった。

「行道」は再開した。松虫たちも少年も列中へ加わった。十数人の男女は声をあげて後夜礼讃をうたいあげてゆく。

もはや灯心は全く消え落ち、さしこむ月光だけが頼りだった。足もとはおぼつかなかった。

住蓮は自分の前を歩く少年との距離をせばめた。ひどく気になることがある。

香りだった。少年の身体から発する匂いだ。体臭とは思えない。高貴な蘭香の香りがする。

右手を伸ばすと少年の肩先に置いた。立ちどまるその耳もとへ顔を寄せた。一倍強烈な香気が発散してきた。

「そなた……」

「何でしょうか」

「女人だな」

「……」

「童子とはたばかりで、そなたは成熟しきった女人だ」
少年は歩きだした。住蓮も歩調をそろえて進んだ。

「住蓮さま。これには仔細がございます」

「当然、あるはず」

「お話し上げたいのです」

「うむ」

「戸外で……ここでは」

ささやく声は、もはや完全に女人のそれだった。ぬんめりと粘るような口説であった。

「列を離れよ。しばらく列外で休んで、それから堂外へ出よ。わしもあとからゆく」

「はい」

住蓮の指示を女（——と呼んでもいいだろう）は素直に聞き入れた。

女の姿が列外へ消えた。住蓮はもう一巡「行道」に付き合ってから、堂外へおり立った。

月光がえがき出す谷間の斜面。

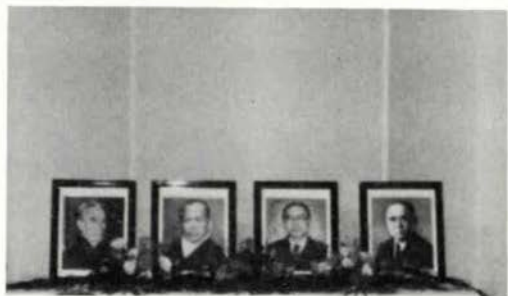
しかし、女人の姿はどこにもない。住蓮はきよろきよろ見まわしながら精舎の横、雑木の樹林の方へ歩きだした。

「住蓮さま、ここです」

かなり太い幹のかげで声がした。童子姿の女はその裏側へ貼りつくようにして立っていたのである。（つづく）

二 編集後記 二

○去る十一月八日（土）、東京・田町笹川記念会館で行なわれた弊会創立四十五周年の記念式典は、おかげさまで無事にとどこおりなく営まさせていただきました。日頃



よりご支援
いただいた
いる皆様方
に、今回は
賛助会員及
び諸般のお
願いをいた
し、大変ご
迷惑をおか
けいたしま
した。しか
し記念式典
自体は、き
わめてなご
やかなうち

に、しかもいささかとも、将来への法然上人讃仰運動へ向けての意義と目標さえ見出しえたかのごとくでした。この会のため、東北、北海道あるいは関西、九州等からはるばる駆けつけていただいた遺来の会員諸兄もありました。まことにありがたいことでした。写真に掲げましたように、故真野正順博士、故中村弁康上人、故佐藤賢順博士、故佐藤良智博士の遺影をお飾りして、昭和十年以来の法然上人讃仰会の四十五年の足跡を振り返ったわけでした。あわせて『浄土』十一月号を記念特集号として、増頁、増刷して広くご配布申し上げたわけでしたが、皆様いかがだったでしょう。まさに、この好機を仏縁として受け止め、お念仏の信仰を増進しながら、明日の明かるい社会生活を祈念して一層の精進をいたしたいと思えます。どうか、これから末永く暖かいご支援のほどを、私、編集子として、心よりお願い申し上げます。

（原 裕）

「浄土」購読規定

会費一カ年 金二、五〇〇円

（送料不要）

浄土 四十六巻 十二月号

昭和十年五月二日
第三種郵便物認可

昭和五十五年十一月二十五日 印刷
昭和五十五年十二月 一日 発行

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 長谷川印刷株式会社

東京都千代田区飯田橋一―十一―六

発行所 法然上人讃仰会

電話東京二六二局五九四四番

千 一三 振替東京八八二一八七番

＝最新刊＝

ブツダの生涯と古代インド仏教世界を現地網羅取材

『ブツダの世界』

—The World of Buddha—

東大名誉教授 中 村 元

駒沢大教授 奈良 康 明 編 著

大正大助教授 佐 藤 良 純

＝写真撮影 丸 山 勇＝

◎仏教学・考古学・インド学の最新学問研究と、現地国考古学局の
学術協力のもと一年半の現地撮影取材とによって成った、わが国
で画期的な国際大型出版。

インド亜大陸未踏の領域に入って精密に把えた900点のカラー・
モノクロ写真を駆使し、釈尊の生涯と古代インド仏教の歴史を、
学界権威が900枚に論述。

最大規模の取材と最高水準の調査研究を集大成した記念碑的図
説インド仏教文化史。

B4変型判 上製クロス装 美麗貼函入 5色刷カバー付
カラー写真212頁 本文一色204頁 全416頁
現金定価 32,000円

発 行 学 習 研 究 社 〒145

東京都大田区上池台4-40-5

TEL 03 (720) 1111 内線 2737